「勘解由小路」再考

――関一雄先生からの宿題に答えて――

勘解由小路　承子

一、はじめに

私の名字「勘解由小路」は「かでのこうじ」と読む。大学二年の四月、専攻課程の指導教員との顔合わせで、関一雄先生に「卒業までになぜ『勘解由小路』を『かでのこうじ』と読むのかを明らかにしてください。」と声をかけられた。その問いに対する答えが卒論「『勘解由小路』考」だった[一]。しかし、当時は図書目録も先行論文も論を進めるための事例もすべて紙媒体での検索だったため、探しきれなかったという思いが残っていた。

それから四十数年後、勤務先の図書館の書架で目に入った『知っておきたい名字と家紋[二]』の中の一文「勘解由小路は、京都の地名である。それは、勘解由使という役所のあったところにつけられた地名である[三]。『かげゆ』のよみが、のちに読みやすい『かでの』にかわった。」に唖然とした。漢字表記に即した読みである「かげゆ」よりも「かでの」のほうが「読みやすい」というのにはとても同意できない。今はMARCもあり、各種データベース、デジタルアーカイブ等の電子媒体もあるので、今一度調べなおし、かつての論文では答えきれなかったものも明らかにできればと思う。

二、「かで」と「かげゆ」

「勘解由小路」は平安京の街路名であり、それを由来とする称号等である。データベースのジャパンナレッジパーソナルで「勘解由小路」で全コンテンツの横断全文検索をし、そのうち傍訓等で読み方を明記しているもの[四]を見ると、『国史大辞典』『日本人名大辞典』は読みを「かでのこうじ」で統一している[五]が、『日本歴史地名大系』は、読み方を明記している二十一例中二十例を「かげゆ（こうじ）」と読んでいる[六]。『世界大百科事典』『日本大百科全書』『東洋文庫』『日本古典文学全集』『明治文学全集』では各項の著者や校注者によって読み方が違い、「かげゆ(の)こうじ」と読んでいるものが一定数ある。それは当該街路名と勘解由使との関係を当然視しているからだろう。そのため、逆に、当該街路名の漢字表記を根拠として勘解由使庁の旧所在地を推定している論考もある[七]。

当該街路名と勘解由使との関係を当然視するのは、漢字表記が「勘解由小路」であることによるのだが、『大内裏図考証』巻一之上には、当該街路名について「勘解由小路」以外の漢字表記があったことが書かれている。

勘解由小路　拾芥抄或作雷解由〇神泉苑所伝図或作神解由〇又

作松井諸図曰勘解由小路四丈〇神泉苑所伝図曰勘解由小路一作神解由小路或松井〇京兆図曰鷹近神中一〇侍中群要（幾亡奏）曰神解小（カテノ）路[八]

本稿では電子媒体も活用し、史資料に具体的に当たり、読み方、「かで」と「かげゆ」との関係、また、当該街路名の漢字表記を見ていきたい[九]。

三、地名の表記と読み

大矢良哲氏の「第2回　地名の表記と変遷（2）」[一〇]によると、一般的に地名の表記と読みについては次のようなことが言えるという。

- 地名は様々な漢字を充てられ、さらに変転する。
- 充当文字は判読可能である限り自由。
- ある程度の転訛はあっても、地名の音（読み）は文字に関係なく頑固に残り続ける。
- 充当文字によって後世、地名の音（読み）が変わることがある。

「勘解由小路」も本来は地名であるので、まず、その音（読み）から見ていきたい。

四、当該街路名の音（読み）の検討

ここでは、史資料などにある当該街路名の仮名表記あるいは漢字表記の傍訓から、当該街路名の音を見ていきたい。なお、本稿では便宜的に次のように分類し表すこととする。

【かての小路】：かてのこうち、かて、かんで、など

【かけゆ小路】：かけゆのこうち、かけゆ（の）、かんけゆ（の）など

※カタカナ表記も含む／清濁不問／「小路」の部分の有無・校異は不問

(1) 古記録における仮名表記

東京大学史料編纂所のデータベース、摂関期古記録データベース（国際日本文化研究センター）、データベースれきはく（国立歴史民俗博物館）、国会図書館デジタルコレクションで検索したところ、仮名表記で【かての小路】は数十例ヒットしたが、【かけゆ小路】は0件だった。ここではそのうち街路名・地名の事例を挙げる。

- 火起高倉カテノ小路（『殿暦』永久五年（1117年）正月八日）[一一]
- カテノ小路
  （東寺百合文書　宝荘厳院敷地検注帳　応永27年（1420年）4月25日）
- きしん申ちの事、かてのこうちのにし、みなみへ十ちやう
  （真珠庵文書　延徳3年（1491年）12月27日）
- かての小路地のさし口」カテノ小路面、南え十丈、西え十丈
  （真珠庵文書　明応元年（1492年））
- かてのこうちのきやうこく二郎三郎
  （祇園社記雑纂目録下第一　材木屋在所　『八坂神社記録下』p293）

『殿暦』には他の公家日記に比べて多くの仮名表記が見られる。なお、国立公文書館蔵の内閣文庫本『殿暦十九』（161-142）でも、「カテノ小路」である。

東寺百合文書、真珠庵文書、祇園社記雑纂目録の事例は時代の下る史料だが、当時の音を反映していると考えられる。

(2) 古典文学での傍訓・仮名表記

① 『大鏡』：「太政大臣忠平　貞信公」「内大臣道隆」

a．勘解由（カデ）の小路（太政大臣忠平　千葉本大鏡二十八オ[一二]）

b．かてのこうち（内大臣道隆）

aは、現存諸本のうち最もすぐれた本文を有しているとされる古本系第一種東松本系諸本では漢字表記で、傍訓は千葉本にのみ見られるものである。bは、確認し得た諸写本・刊本で、すべて仮名表記で、濁点が付く以外の校異はなく、『大鏡』が書かれた当時の当該街路名の音を反映していると考えられる。

② 『無名抄』：貫之家

・かてのこうち

確認できた諸本のほとんどが「かてのこうち」で、校異は「カテノコウチ」（応安四年写）、「かての少路」（宮書「無明抄」）、「勘解由小路」（宮書伏見）などであり、【かけゆ小路】はない。

③ 『沙石集』：巻第二の五「地蔵の利益の事」

当該街路名は3か所で見られる。確認できた諸本[一三]で、最初の1か所は漢字表記で傍訓はさまざま[一四]だが、あとの2か所で、長享三年写以外は、仮名表記「カテノ小路」となっている。仮名表記の事例により、音の資料としては【かての小路】に分類できる。

これらのほか、江戸時代後期の小沢蘆庵の歌集『六帖詠草』にも、2か所仮名表記で「かての小路の家」が見られる。

(3) 古辞書での傍訓・仮名表記

① 簾中抄：京中付名所

・かけゆのこうち（冷泉家本[一五]）

・かんけゆの少路（江戸期の流布本[一六]）

・勘解小路（白造紙[一七]）

冷泉家本は現存最古の写本[一八]で、文永頃の書写[一九]とされている。流布本では「勘解由」の部分には校異がなく「かんけゆの」となっている。「カンケユ」は文明本節用集にも見られるが、節用集諸本の中では孤立している。『白造紙』は、正治年中（1199/1201）の書写で「簾中抄の原撰の姿を察知し得べき[二〇]」ものとされているが、漢字表記で「勘解小路」と「由」を欠いた形で出てくる。あるいは『簾中抄』原本も漢字表記で、現存諸写本に至るまでに何らかの改変があった可能性も十分ある。『簾中抄』の事例は古辞書の中でも孤立しており、音の有力な資料にはなし得ない。

② 下学集・節用集

表1は、『下学集』および『節用集』の諸本の「勘解由小路」に付せられた傍訓をまとめたものである[二一]。

『下学集』および『節用集』の古写本・刊本の大半の傍訓は【かての小路】であり、【かけゆ小路】と施訓している諸本の事例は系統上孤立しているか、あるいは全体的に独自の増補・改変が見られる写本の傍訓であり、転写時に充当文字に引かれて改変されたと考えられる。また、饅頭屋本では、初刊本の「カデノコウヂ」を通行本等では「カゲ（ユ）ノコウヂ」に彫り直している痕跡が残っている[二二]。

(4) 近世期の地誌や京図での「勘解由小路」の読み

【かての小路】：寛永十四年洛中絵図[二三]・『京雀』目録左訓・『京雀』本文[二四]・『京羽二重』[二五]・『山州名跡志』[二六]・『山城

表１　下学集および節用集諸本における「勘解由小路」の傍訓

	分類		「勘解由小路」の傍訓	
下学集	第一類本		カテノコウチ	（東京教育大学蔵古本下学集）
			カテノコウチ	（榊源本下学集）
			カデノコウヂ	（黒川本/温故堂文庫本）
			カテノコウチ カテ　コウチ（神出小路）	（慶長十五年春良注本）
			カケユノコウヂ	（村口四郎氏蔵古写本）
			カデノコウヂ	（春林本下学集）
	第二類本		カンケ	（前田家蔵古本下学集）
			カンテノコウチ	（文明十一年本）
			カケユノ	（天文二十三年本）
	第三類本		カテノ	（亀田本下学集）
	刊本		カデノコウヂ	（元和三年刊本）
			カテノコウヂ	（刊本　明倫館印）
			カゲユノコウチ	（増補下学集）
			かでのこうぢ	（平假名註下學集）
節用集	印度本	第一類（弘治二年本類）	カデノコウチ	（弘治二年本）
			カデノコウヂ	（永禄十一年本）
			カデノコウヂ	（図書寮零本）
			かでのこうぢ	（和漢通用集）
			カテノコウヂ	（天正十七年本）
			カケユノコウヂ	（黒本本）
		第二類（永禄二年本類）	カデノコウヂ	（永禄二年本）
			カゲノコウチ	（新写永禄五年本）
			カテノコウヂ	（経亮本）
		第三類（枳園本類）	カゲユノコウヂ カデノ	（棋園本）
	伊勢本	第四類（天正二十年本類）	カテノコウチ	（増刊下学集）
			カゲユノコウヂ	（龍門文庫蔵室町中期写本）
			カデノコウヂ	（天文十九年写本）
		第五類（伊京集類）	カテノコウヂ	（伊京集）
		第六類（天正十八年本類）	カデノコウヂ	（天正十八年刊本）
			カデノコウヂ	（早大本）
			カゲユノコウヂ	（阿波国文庫本）
		第七類（饅頭屋本類）	カデノコウヂ	（東京教育大学蔵本）
			カゲノコウヂ	（書陵部蔵本）
			カゲ〓ノコウヂ	（国会図書館所蔵本）
		第八類（温故堂本類）	カデノコウヂ	（空念寺旧蔵本）
		第九類（増刊本）	カンケユ	（文明本）『雑字類書』
	乾本	第十類（易林本類）	カデノコウヂ	（天理図書館蔵本）
			カデノコウヂ	（易林本平井版）
			カデノコウヂ	（小山版）
			かでのこうぢ	（草書本）

名勝志』[二七]・『山城名跡巡行志』[二八]・『京町鑑』[二九]・寛文12年洛中洛外大図・「宝暦町鑑」[三〇]

【かけゆ小路】：『京雀』目録右訓・『都すゞめ案内者』[三一]・天明6年の洛中洛外大図・京町御絵図細見大成[三二]

江戸期は、早くは【かての小路】だったが、時代が下ると【かけゆ小路】に変わっている。

(5) 称号・小路名（こうじな）「勘解由小路」の読み

称号として「勘解由小路」を使ったのは、①～⑥の六家流である。

① 藤原北家世尊寺流：経尹（勘解由小路二品禅門）、行尹ほか

『徒然草』には「勘解由小路二品禅門」（160段）、「勘解由小路の家の能書の人々」（237段）が出てくるが、正徹自筆本では、ともに「かての少路」と仮名書きされている[三三]。

② 藤原北家勧修寺家流：（平安～室町）経房（吉田とも号する『吉

記』の著者）、高清（海住山とも号する）ほか

『お湯殿の上の日記』には②の高清が、「かてのこうちの中納言」など数回登場する[三四]。『お湯殿の上の日記』は、御所に仕える女官の機密日誌であり、称号等は正しく記録されていると考えられる。

③　藤原北家日野家流（鎌倉～南北朝）：頼資（広橋家）、兼仲（『勘仲記』の著者）ほか

『東寺百号文書』に「文永十一年三月　日」かてのこうち殿よりいつそやつたへ（略）」の事例があるが[三五]、③の可能性が高い。

④　清和源氏足利氏流（斯波家／室町）：義重ほか

長享元年九月十二日常徳院殿様江州御動座当時在陣衆着到[三六]「三職」のところに斯波氏が【かての小路】と呼ばれていたことをうかがわせる「勘出小路兵衛佐義遠」がある。

⑤　賀茂氏：（室町）在盛ほか

⑥　藤原北家日野烏丸流（江戸～現在）資忠ほか

浅野梅堂『寒燮璅綴』巻之一に「名乗ノヨミハムツカシキ多シ（中略）苗字ニテモ勘解由小路ヲカテノコウシ（略）[三七]」とあるが、これは⑥の読みのことである。

「天保二年彫刻　慶応四年再刻　京町御絵図細見大成[三八]」には、⑥の当時の住まいを「カテノ小ジ」と表示している。

次に、宮中の女官を呼称するためなどに使われた「小路名（こうじな）」だが、「かての小路（『石清水文書』）[三九]、「かてのこうちの女房」（『美吉文書』）[四〇]、「カテノ小路右衛門督局」（『後水尾天皇　元和7年辛酉年末雑載』元和7年6月3日）[四一]のほか『押小路甫子日記』『御湯とのゝうへ乃日記』、『中山績子日記』、『无上法院日記』などに多数の仮名表記の事例がある。すべて【かての小路】であり【かけゆ小路】の事例はない。

以上により、当該街路名の音、称号・小路名（こうじな）の読みは、「かでのこうじ」である。また、「かげゆ(の)こうじ」は、転写等の際の改変が考えられる後発の読みであり、「かげゆ」から「かでの」に「かわった」ということは否定できる。

五、当該街路名の漢字表記の検討

先述のように当該街路名には「勘解由小路」以外にも「神解小路」など様々な漢字表記が確認されている。表2は古記録に出てくる当該街路名を網羅的に探索しまとめたものである[四二]。

(1)　神解小路（小道）

『大内裏図考証』が引用している『侍中群要』には「神解小路」が3か所で見られる[四三]。『侍中群要』の諸写本は明らかな重複・錯簡さえもそのまま変えずに転写しているので、この「神解小路」も『侍中群要』が成立したとされる円融朝後一条後朱雀朝にまで遡及できると考えられる。これは、『小右記[四四]』『左経記』『春記』の当該街路名の表記と時期的に符号する[四五]。

『九条家本延喜式巻三十裏文書』は、当時の生の姿を知ることができる貴重な史料で、そこで見られる「神解小路」は、条坊による表示から小路名による地点表示に変わってきた時期[四六]の事例になる。

『本朝世紀』では本例以外は「雷解小路」であり、また、他の「神解小路」の事例の出現時期から考えて、寛和当時の表記であると考

表２　古記録における「神解小路」「雷解小路」「勘解由小路」

	史料名	和暦	西暦	本文	出典
1	本朝世紀	寛和2年2月26日	986年	有失火事。京極大路西。富小路東。待賢門大路北。**神解小路**南一町也。	国史大系 第9巻 新訂増補，ｐ132
2	九条家本延喜式巻三十裏文書	寛弘7年10月30日	1010年	一斗依宣旨、有大宮**神解小道**御障子	大日本史料第2篇之6，ｐ737
3	小右記	万寿4年9月1日	1027年	暁更東院西大路以東北邊**神解小道**南北小宅少〻焼亡	小右記9，尊経閣善本影印集成；64，ｐ52
4	左経記	長元9年5月19日	1036年	自上東門路東行、自堤上南行、自**神解小路**末斜渡河原、	史料大成 第4，ｐ439
5	春記	長暦4年10月22日	1040年	今夕行幸間、於東院東大路輿**神解小路**邊、宇佐宮下部、	史料大成 続編 第36，ｐ255
6	水左記	承暦4年10月19日	1080年	朱雀**神路小路**故宇治大納言堂	宮内庁書陵部所蔵 自筆本 史料大成 第5 7コマ
7	水左記	承暦5年7月25日	1081年	高倉東**勘解由小路**南	水左記 帥記（史料通覧），ｐ139
8	殿暦	康和4年閏5月7日	1102年	万里小路与**勘解由**程にて雨大降	大日本古記録［第12］第1，ｐ126
9	中右記	嘉承元年12月19日	1106年	宗佐（藤原）・師安（中原）等宅、**雷解小路**堀川、雖近〻余炎無恐	大日本古記録　中右記６、ｐ238
10	殿暦	永久5年1月8日	1117年	法成寺塔有火、火起高倉**カテノ小路**出羽前司光国家、	大日本古記録　殿暦5，ｐ4
11	十三代要略	永久5年1月8日	1117年	法成寺東西塔南大門並故中宮京極御堂等焼亡**雷解小路**云々	続群書類聚854下ｐ373　内閣文庫本65コマ
12	長秋記	元永2年10月21日	1119年	自烏丸北行、歸給**上手小路**殿	史料大成 第6 長秋記，ｐ172
13	中右記	大治2年4月5日	1127年	新院第二姫宮渡卜定所給、是相模守盛重新造宅、**雷解小路**南堀川東角也	史料大成 第12，ｐ301
14	百錬抄	天承１年10月11日	1131年	於**勘解由小路**河原被殺害	国史大系 第11巻 新訂増補 ｐ59
15	中右記	長承1年1月10日	1132年	終日天除、時々小雨、**雷解小路**富小路地四戸主券、	史料大成 第13，ｐ275
16	長秋記	長承2年9月2日	1133年	渡盛重宅堀川**上手小路**	史料大成 第7 長秋記 第2，ｐ169
17	中右記	長承2年9月2日	1133年	又還御渡御盛重家**雷解小路**南堀河東亭	史料大成 第14，ｐ65
18	仙洞御移徙部類記	保延7年3月3日	1141年	初渡御新御堂御所白河**勘解由小路**末、女御殿同渡御、	上皇御移徙記ｐ357
19	本朝世紀	仁平1年閏4月20日	1151年	今夜。**雷解小路**南北堀河東有炎上。	国史大系 第9巻 新訂増補，ｐ767
20	本朝世紀	仁平1年5月20日	1151年	未剋**雷解小路**南烏丸西有炎上　右少将公親朝臣宅也	国史大系 第9巻 新訂増補，ｐ768
21	本朝世紀	仁平1年6月7日	1151年	夜半、**雷解小路**北京極東西焼亡、	国史大系 第9巻 新訂増補，ｐ771
22	山槐記	仁平2年2月7日	1152年	天晴、午刻参関白殿**勘解由小路**、依有犬死穢即退出了、	史料大成 第19 山槐記 ｐ3
23	兵範記	仁平2年3月16日	1152年	早旦関白殿、令退下自内御直廬給、**勘解由小路**烏丸御宿所	史料大成 第15，ｐ105
24	本朝世紀	仁平2年12月22日	1152年	今夜。中宮自内裏行啓。出土佐守季行朝臣宅。**雷解小路**北富小路東。	国史大系 第9巻 新訂増補，ｐ843
25	山槐記	仁平2年12月22日	1152年	今夜中宮令出土佐守季行朝臣**勘解由小路**富小路家給	史料大成 第19，ｐ22
26	兵範記	仁平2年12月22日	1152年	今夜中宮令退出御産所、**勘解由小路**給之、行啓也	史料大成　第15，ｐ167
27	本朝世紀	仁平3年1月29日	1153年	中宮自内裏行啓**雷解小路**御所。公卿以下供奉如恒	国史大系 第9巻 新訂増補，ｐ847
28	本朝世紀	仁平3年12月8日	1153年	今夜**雷解小路**東洞院有火事。新院近邊也	国史大系 第9巻 新訂増補，ｐ889
29	本朝世紀	仁平3年閏12月16日	1153年	中宮自**雷解小路**入内	国史大系 第9巻 新訂増補，ｐ896
30	本朝世紀	仁平3年閏12月23日	1153年	殿下御**雷解小路**直廬不参内給	国史大系 第9巻 新訂増補，ｐ897
31	安倍泰親記	仁安1年12月10日	1166年	**勘解由小路**以南、萬里小路以東角藏人勘ケ由次官藤經房宅、拂地焼亡	史籍集覧 24 改定，ｐ106
32	吉記	承安3年6月8日	1173年	秉燭之後逐電向**勘解由小路**、即以平滅無別事	史料大成22、ｐ3
33	清獬眼抄	承安4年6月５日	1174年	長門三品隆朝家焼亡**勘解由小路**京極殿東南	群書類従 第7輯，ｐ611
34	玉葉（玉海）	承安4年６月６日	1174年	京極東**勘解由小路**南春日北二町燒亡云々	玉葉 第1，国書刊行会，ｐ372
35	顕広王記	治承2年10月21日	1178年	於四条河原切左大将前番長中臣重種本鳥了（雷解小路町口）	国立歴史民俗博物館所蔵『顕広王記』承安四年・安元二年・安元三年・治承二年巻

えられる。

また、『清獬眼抄』にも「但神解鷹司等小路稱之」の形で「神解小路」が2か所見られるが、これは、引用元の資料にあった「神解」をそのまま伝えているものと考えられる事例である[四七]。

そして『掌中歴』および『二中歴』[四八]では「條路左京」の項で、「一正土北辺　鷹近神中一（後略）」と、当該街路名の頭文字を「神」としている。続群書類従完成会の活版本『続群書類従』所収の『掌中歴』では、この部分を「鷹近勘中一」（p108）としており、今まで「勘解由小路」の事例として扱われてきているが、国立公文書館・書陵部所蔵の『続群書類従』所収の『掌中歴 下』では、「鷹近神中一」となっている[四九]。他の諸写本[五〇]も「鷹近神中一」であるので、活版本は翻刻時に「神」を「勘」に変えてしまったのだろう。

そして、摂関期の当該街路名の事例を各種データベースで検索したところ、「雷解（小路）」「勘解由小路」「勘解小路」は1件もヒットしなかった。よって、摂関期には当該街路名は「神解小路（小道）」と表記されていたと考えられる。

(2) 雷解（小路）

『十三代要略』『中右記』『本朝世紀』『顕広王記』で見られる表記である。『顕広王記』の事例は、国立歴史民俗博物館所蔵の自筆本を翻刻したものである[五一]。この時期に当該街路名が「雷解小路」と書かれていた確証となる。

また、「雷解小路」は古記録の他に、『掌中歴』の宮城指図・京中指図、『古鈔本拾芥抄』の宮城指図[五二]などでも見られる。

(3) 勘解由小路

管見では、古記録に「勘解由小路」が出てくるのは、『水左記』の承暦5年7月25日の記事が最も早い。しかし、これには校異がある。参照した『史料通覧』の底本は、国立公文書館蔵「内閣本　校正本　明治17補写　第三巻」だが、確認できた他の写本[五三]では当該箇所は「由」のない「勘解小路」となっており、「由」が「補写」されたことが十分考えられる。「勘解小路」は、『白造紙』『二中歴』『拾芥抄』にも見られる漢字表記である。

また、『水左記』には、もう1例「朱雀神路小路故宇治大納言堂」（承暦4年10月29日）という悩ましい事例がある。『水左記』には部分的に自筆本が伝わっており、本例は宮内庁書陵部所蔵の自筆本の「承暦4年」で確認した事例である。「神路小路」の異名を持つ街路名はなく、「神解小路」の誤記ではないかともされている[五四]。あるいは『水左記』が書かれる時期に表記が変わり、混乱をきたしていたのかもしれない。

『水左記』の事例は不確かだが、「勘解由小路」は、『殿暦』の康和4年（1102年）の事例以下、『仙洞御移徙部類記』2例『山槐記』14例『兵範記』35例[五五]『百錬抄』『泰親朝臣記』『吉記』など、12世紀初頭以後多数見られるようになる。特に『吉記』の著者の藤原（吉田）経房は、「勘解由小路」も称号としているので、経房の時代には一般的には「勘解由小路」が使われるようになったと考えられる。

(4) 表記の変遷・混交・交錯

『大内裏図考証』が引用する「神泉苑所伝図[五六]」の「神解由小路」だが、漢字表記「勘解由小路」が使われ始めたと考えられる12世紀

前半期に成立したとされる『九条家本廷喜式』所収左京図に見られる。これは、「神解小路」と「勘解由小路」が混交したものである。

また、「勘解小路」という「由」の欠けた表記が、同時期の『白造紙』や『水左記』に見られ、『二中歴』の条坊図の「勘解小路」のように「神解小路」と「勘解小路」とが、漢字の違いであることを示す事例もある。これらから、たとえば、「神解」の一字目の「神」だけ、語義とは関係なく、表しうる音の似通う漢字「勘」に変わり「勘解」となり、「勘解」は勘解由使の略称[五七]なので「勘解由小路」と書かれるようになったとも考えられる。

次に、「仁平2年12月22日」の記事だが、土佐守季行朝臣宅の場所を示し、『本朝世紀』のみ「雷解小路」の表記を採り、あとの二者は「勘解由小路」の表記を使っている。『本朝世紀』は、寛和2年の事例では「神解小路」を使っているが、この時期には一貫して「雷解小路」を使っている。他の「雷解小路」を使う公家も、この時期には「神解小路」ではなく「雷解小路」を使っているので、この時期に「神解小路」から、「雷解小路」あるいは「勘解由小路」に表記が変わり、併存していたものと考えられる[五八]。

また、「雷解小路」と「勘解由小路」が混交した「雷解由」は、『古鈔本拾芥抄』以外の『拾芥抄』諸写本に見られるが、表3のような当該街路名の漢字表記の交錯も指摘できる。

勘解：宮城指図

勘解由小路：諸司厨町／外記町、諸名所部／菅原院、東京図

雷解由：京程部、東京図

雷解：西京図（刊本）

以上の混交・交錯の事例により、「神解小路」「雷解小路」は「松井」のような当該街路の別称ではなく、表記の違いであるということが考えられるのである。

(5) 表記の変遷と音

①「神解小路」の音（読み）

明覚律師の『悉曇要訣[五九]』の巻三に次の一節がある。

神解小路ヲカムテノコウチトイフ[六〇]。

また、『侍中群要』の早稲田大学所蔵の寛政9年写本で、「神解小路」に「カテ」と施訓しているものがある[六一]。また、既掲の書陵部所蔵（函架番号554・21）『大内裏図考証』では巻一之上の「勘解由小路」の項で、『侍中群要』を引用し「神解小路」に「カテノ」と施訓している。

これらにより、「神解小路」の音は、【かての小路】であると考えられる。

②「雷解小路」の音（読み）

「永久5年1月8日」の法成寺が焼失した記事では、『殿暦』では「カテノ小路」、『十三代要略』では、「雷解小路」を使う[六二]。

また、「長承2年9月2日」の禧子内親王が還御した盛重宅の場所を示して、『中右記』では「雷解小路[六三]」、『長秋記』では「上手小路[六四]」を使っている。これらにより、「カテノ小路」＝「雷解小路」＝「上手小路」である。よって、「雷解小路」「上手小路」は、【かての小路】の漢字表記だといえる。

他にも、『中右記』の「嘉承1年12月19日」で『大日本史料』では「雷解小路（第3編之8　p953」と（　）のついていない傍訓

表３　『拾芥抄』諸本における当該街路・勘解由使庁（付『掌中歴』）

	資料名	所蔵	刊写	宮城指図　省略		外記町	菅原院	京程部　小路名		東京図	西京図
				小路名	勘解由使庁			左京	右京	京中指図左京	
0	掌中歴	宮内庁書陵部 ほか	写	雷解	勘解由			鷹近神中一		雷解 （京中指図左京）	
1	古鈔本拾芥抄	東大史料編纂所 重要文化財	写	雷解	勘解由						
2	明応六年写略要抄	東京大学所蔵	写	勘解	勘解	勘解由少路	勘解由小路	雷解由	松井 雷解由	勘解由小路	松井
3	清原業賢、清原国賢筆 拾芥抄（中巻：永正７年写）	京都大学所蔵 重要文化財	写			勘解由小路	勘解由小路	雷解由	松井 雷解由		
4	略要抄（天文23年写）	国会図書館所蔵 WA16-44	写			勘解由少路	勘解由小路	雷解由	松井 雷解由	（東京図） 松井 雷解由 （文東図） 勘解由小路	松井
5	天正十七年吉田梵舜自筆 拾芥抄	尊経閣文庫蔵	写	勘解	勘解	勘解由少路	勘解由小路	雷解由	松井 雷解由	雷解由 勘解由小路	松井
6	拾芥抄 慶長年間	国会図書館所蔵 WA7-103	刊	勘解	勘解	勘解由少路	勘解由小路	雷解由	松井 雷解由	勘解由小路	雷解
7	略要抄 寛永19刊（南頬書堂）	国会図書館所蔵 837-87	刊	勘解	勘解	勘解由ノ小路	勘解由ノ小路	カデ雷解由	松井 雷解由	勘解由小路	雷解
8	拾芥抄３巻 新版拾芥抄	国会図書館所蔵 わ 031-57	刊	勘解	勘解	勘解由ノ小路	勘解由ノ小路	カデ雷解由	松井 雷解由	勘解由小路	雷解
9	拾芥抄 明暦二年刊（村上勘兵衛）	国会図書館所蔵 031.2-To388s	刊	勘解	勘解	勘解由ノ小路	勘解由ノ小路	カケユ雷解由	松井 雷解由	勘解由小路	雷解
10	故実叢書 略要抄	吉川弘文館明 39.2	刊	勘解（由ノ）	勘解	勘解由ノ小路	勘解由小路	「勘イ」 カケユ雷解由	松井 雷解由	勘解由小路 雷解由イ	雷解 「松井」

※参考資料として、『拾芥抄』が典拠としたと考えられる『掌中歴』も表に加えた。
※傍訓があるものはそのまま書き入れた。

を付している。この傍訓は、国会図書館所蔵延享元年本や内閣本にはないが、『大日本史料』の典拠資料にはあったと考えられる。

また、『拾芥抄』の刊本では、表記の混交した「雷解由」に「カテ」と施訓しているものがある[六五]。

以上の漢字表記、その混交と交錯、音（読み）の考察により、「神解小路」「雷解小路」「勘解由小路」は漢字表記の違いであり、当該街路名は、当初は「神解小路」で、後に、「雷解小路」あるいは「勘解由小路」と表記は変わった、しかし、その音は頑固に残り続けたといえるだろう。

六、「かで」

「かで」という音は、どこからくるものなのだろうか。その答えを解く「鍵」を今回は見出すことができた。先に「神解小路」の音として挙げた『悉曇要訣』の事例だが、『悉曇要訣』は古代日本語の一面を明らかにする貴重な資料とされている。この一節は転訛の例示の中に出てくる。明覚は事例として挙げてはいても説明はしていない。そのため「説明し得ない転訛[六六]」あるいは、「口語の言語と、文書による言語の相違をのべたもの[六七]」とされているが、この一節は、文書では「神解小路」と書かれる街路名が当時の口語では、「カミトケ」から「カムテ」へと転訛し、『カムテノコウチ』と発音されている、という意だと考えられる。

小島好治氏の『国語学史』（刀江書院）によると、「富士谷御杖の『北辺随筆』に亡父成章の説を引きて（中略）例として『としのうちに』が『としぬちに』となり、『さもあらばあれ』が『さまれば』となる類を引きて説明せるところによればやはり同じく約音現象を

反切といへるなり。（中略）国語に於ける反切とは二つの音節の間に生ずる音韻現象の一種にして、（中略）例えばかきkakiの中間akが脱落してkiとなるがごとし」（p104）とあり、また、『日本国語大辞典』の「反切」の解説には、「反切は、中国側に典拠を有するものばかりではなく、日本においても、平安時代には独自の反切を作り出す場合があった」とある。

「カミトケ」から「カムテ」への転訛もこれが当てはまるのではないだろうか。すなわち、「トケ」のトの子音とケの母音が結合して「テ」となった。言い換えると、トケtokeの中間okが脱落してテteとなったと考えられるのである。なお、「カミ」が「カム（ン）」となるのは撥音便で、撥音「ん」は無表記で「カテ」となる。よって、当該街路名の「かで」は、「神解（かみとけ）（＝落雷）」が転訛したものと考えられるのである。

七、「勘解由（かげゆ）小路」―勘解由使との関係

『掌中歴』『古鈔本拾芥抄』の宮城指図では、街路名は「雷解」、勘解由使庁は「勘解由」と明らかに区別して書かれている。また『中右記』には「勘解由使」の略称「勘解」も散見されるが、街路名には混乱することなく一貫して「雷解小路」を使っている。「勘解由小路」出現・定着時に「雷解小路」を使っている公家たちは、当該街路になんの関係もない「勘解由」を使うことに抵抗を覚え、この街路名本来の語義[六八]をより明瞭に示すため「雷解小路」を使っていたのかもしれない。

しかし、時代が下ると、「勘解由使庁」とは区別されていたことも、当該街路名の由来も忘れられてしまう。

たとえば、表3のように『古鈔本拾芥抄』とその他の『拾芥抄』写本・刊本では、宮城指図で以下のような改変が見られる。

街路名：雷解（古鈔本拾芥抄）→勘解（その他写本・刊本）

勘解由使庁：勘解由（古鈔本拾芥抄）→勘解（その他写本・刊本）

『古鈔本拾芥抄』では区別されていた街路名と勘解由使庁が転写の中で混同され、ともに「勘解」になってしまっている。そうして、後出の充当文字に引かれた後付けの由来である勘解由使（庁）との関係が当然のように語られるようになり、「かげゆ（の）こうじ」と読まれ、「かで」も「かげゆ」から変わったなどと言われるようになるのである。

しかし、当該街路名の音や由来を踏まえれば、「勘解由小路」の読みは「かでのこうじ」であり、街路名・称号としては「かげゆ（の）こうじ」と読むのは誤りである。また、当該街路名の由来を勘解由使との関係に求めること、街路名を根拠にして勘解由使庁の旧所在地を推定することも適切ではない。なお、現在は、充当文字に引かれ、地名の音も変わり、「京都市上京区室町通下立売上る勘解由小路町」は、「かげゆこうじちょう」と読まれている。

八、宿題の答え

「勘解由小路」をなぜ「かでのこうじ」と読むのかという関先生に出された宿題の答えは、次のようになる。

当該街路名は、もとは「神解小路」と書かれ、口語では、「神解：かみとけ」は、転訛により「か（ん）で」と発音された。そして、この転訛は、撥音便と平安期に見られる国語における「反切」によっ

て説明できる。十二世紀ころ漢字表記は「勘解由小路」に変わったが、地名であるため「かでのこうじ」という音は文字に関係なく頑固に残り続けたので、「勘解由小路」を「かでのこうじ」と読むのである。「かで」は「勘解由（かげゆ）」から変わったものではなく、「神解（かんで）（＝落雷）」を語源とする。「勘解由使（庁）」は後発の充当文字に引かれて生じた後付けの由来である。

九、あとがきにかえて

『大鏡』の「太政大臣忠平」の次の一節だが、

つねにこの三人の大臣達のまいらせ給れうに、小一条の南、勘解由の小路には、石だゝをぞせられたりしが、まだ侍ぞかし。宗像の明神のおはしませば、洞院小代の辻子よりおりさせ給しに、あめなどのふるひのれうとぞうけたまはりし。凡その一町は人まかりありかざりき。いまは、あやしのものもむま・車にのりつゝみし〳〵とあるき侍れば、むかしのなごりに、いとかたじけなくこそみたまふれ。[六九]

古本系大鏡は当該街路名の表記として「勘解由の小路」を採るが[七〇]、本稿の考察から、逸話当時の漢字表記は「神解小路」だろう。そして、牛車で通れず、雨天の日のために石畳を敷いたという逸話と「神解小路」（＝落雷小路）という物騒な街路名とは無関係とは思えない。ちなみに、『二中歴』の「名家歴」では、『大鏡』で当該小路が関わる「小一條」と「華山院」の所在地の説明に「神鳴小路」という街路名を用いている[七一]。

しかし、「いま」は、もうそんな逸話も忘れられ、「勘解由小路」と書かれるようになり、人々が馬や車に乗ってみしりみしりと歩くようになったとは言えないだろうか。そしてこの逸話を知る公家は、一般的には「勘解由小路」という表記が使われるようになってからも、頑固に「雷解小路」を使っていたのかもしれない。

ところで、ここ十数年図書館で仕事をしてきて、辞事典の信憑性はレファレンスサービスのカギになるのだが、「勘解由小路」の読みを「かでのこうじ」で統一している『国史大辞典』『国書人名辞典』、また、平安京の街路名と現在の町名の項目を別立てし、きっちり読み分けている『角川日本地名大辞典』の信憑性の高さを、今回の考察を通して改めて確認できた次第である。

一　卒論をまとめ直したものが、『山口国文4』所収論文である。

二　武光誠『河出書房新社』2020　p120

三　正しくは「勘解由使」ではなく「勘解由使庁」だろう。これは確かに「通説」ではあるが、勘解由使庁は九条家本延喜式所収図等では太政官の北西の隅に位置し、便宜的に街路の交叉点で示すと、春日小路南坊城小路東になる。当該小路沿いにも小路の延長線上にもない。また、勘解由使の官衙町は史資料では確認されていない。ただ『東寺長者補任』には「止勘解由司庁号内道場真言院承和二年（835年）『群書類従第4輯』p622）とあり（『伊呂波字類抄』『元亨釋書』『大内裏図考証』にも同様の記述がある）、平安初期には当該小路の延長線上の真言院の位置にあった。しかし、このことだけでは、由来とするには十分と

はいえない。

四 「勘解由小路」は２６７件、うち傍訓等で読みを明記しているものは、１７４件あった。（2023年11月29日検索）中には、『新選漢和辞典Web版』に「かごのこうじ」という読みもあった。この先行例は『日本の苗字―あなたの祖先を調べる』（渡辺三男 毎日新聞社1964）の所収索引にあるものだが、本文での読みとは違っており整合性に欠けている。また、「かげゆこうじ」以外の読みとして採っている読みが「かでのこうじ」ではなく「かごのこうじ」であることから「で」と「ご」のひらがなの語形の類似による誤植の可能性が高い。

五 ジャパンナレッジにはない辞事典では、『国書人名辞典』（市古貞次［ほか］編纂　岩波書店）も読みは「かでのこうじ」でそろえる。『日本国語大辞典』『国書データベース』では、ほぼ「かでのこうじ」と読んでいるが「かげゆこうじ」と読む項や書誌がある。（ともに整合性に欠ける点が指摘できる。）

六 「かげゆ（こうじ）」と施訓している二十例は街路名。ジャパンナレッジにはない辞事典では、『平安時代史事典』が、「勘解由小路　かげゆこうじ」で立項しながら、本文では『かでのこうじ』と訓んだらしい」としている。

七 東野治之「南都所伝宮城図欠について」（『古文書研究20』p1-12）、笠井純一「勘解由使職制の変質　宣旨「職」から職事「官」へ」（宮川秀一［編］『日本史における国家と社会』思文閣出版 p93-109）

八 『大内裡図考証』函架番号554・21　書陵部所蔵資料目録・画像公開システム／国書データベース　この部分は諸写本で校異・省略が多いが、ここで参照した書陵部所蔵の「函架番号554・21」を西井芳子氏は、「自筆とみてよいと考える」としている。（「裏松戸禅の自筆遺稿―主として大内裏図考証と皇居年表について（『古代文化』20－4　p86-92）また、福田敏朗氏はこの写本を献上本と判断できるとしている。（「寛政九年献上の『大内裏図考証』について」（『古代文化』34－3　1982　p133-136）

九 平安京の街路名の先行研究には、川勝政太郎「街路名とその文献」（上・下）（『市迹と美術』28－4・6）岸元史明『平安京地誌』（講談社1984）「平安宮、平安京、道、橋、町、第宅の構造」（p233-351）等がある。

一〇 大矢良哲　第2回　地名の表記と変遷（2）」日本歴史地名大系ジャーナル　ジャパンナレッジ

このほか、白木進「地名に見る音韻字形の変遷と音韻復元における限界」『山口県地方史研究』27　1972）にも「地名の音韻字形の変遷例」がまとめられている。（p17-18）

一一 『大日本古記録　殿暦5』p4　『殿暦』には自筆本は現存しない。参照した『大日本古記録』は、文永四年頃（1267年）、近衛基平が、家司等と共に書写した古写本22冊（京都陽明文庫所蔵）を底本としている。

一二 『天理図書館善本叢書　和書之部 第15巻（大鏡諸本集）』天理大学出版部　p59

一三 長享三年（1489年）写（京都大学所蔵）、米沢図書館藏古鈔十二帖本（市立米沢図書館蔵）国立公文書館内閣文庫本、学習院大学文学部日本語日本文学研究室、国会図書館所蔵古活字版などを確認した。

一四 勘解由（カデ）ノ小路（京都大学所蔵の長享三年（1489年）写）勘解由（カケユ）ノ小路（コウチ）（米

沢図書館藏古鈔十二帖本沙石集）など

一五 『簾中抄・中世事典・年代記』冷泉家時雨亭叢書：第48巻　p135

一六 国会図書館所蔵本、京都大学所蔵平松本・清家文庫、学習院大学所蔵本など、『簾中抄（古辞書叢刊：増補）』を確認した。

一七 高野山正智院所蔵の白造紙調査のため東京帝国大学国語研究室が借り請けていたところ1923年（大正12年）9月1日、関東大震災により焼失、その影写本のみ現存。（東京大学文学部国語研究室　一般　12D. 12. 3・No.219317）

一八 東京大学図書館蔵の鎌倉時代鈔本（下一帖）は関東大震災で焼失。

一九 簾中抄文化庁　国指定文化財等データベース『簾中抄・中世事典・年代記（冷泉家時雨亭叢書　第48巻）』（朝日新聞社）

二〇 川瀬一馬著　『古辞書の研究 増訂版』雄松堂出版　P262）

二一 影写本、デジタルアーカイブ、所蔵図書館による複写、複製本で確認したものをまとめている。

二二 饅頭屋本には初刊本、通行本、冠彫再刻本などといった版の違いがあり、東京教育大学蔵本が初刊本、書陵部蔵本が通行本であるとされている。（近藤尚子「節用集饅頭屋本の初刊本と通行本と」『文化女子大学紀要 人文・社会科学研究』2000.1　p1-13）、なお、国会図書館所蔵本には書陵部蔵本の傍訓にさらに手を入れた痕跡が見られる。

二三 『洛中絵図』宮内庁書陵部

二四 寛文5年刊

二五 貞享2年刊

二六 正徳1年刊

二七 正徳1年刊

二八 宝暦四序

二九 宝暦12年

三〇 寛文12年洛中洛外大図・『宝暦町鑑』・天明6年の洛中洛外大図での表記については、『角川日本地名大辞典』によった。

三一 『新修京都叢書 第3巻　2版』p128

三二 天保二年彫刻 慶応四年再刻 西尾市岩瀬文庫

三三 正徹自筆本徒然草〈下〉（笠間書院　p24　p83）

三四 本例は文明10年6月25日、この他、「かてのこうち新中納言」（文明10年7月25日）「かてのこうちの前中納言」（文明10年11月25日）など（『続群書類従補遺三　お湯殿の上の日記」p71, p74-p87』

三五 東大史料編纂所データベース

三六 『群書類従』国立公文書館デジタルアーカイブ

三七 国会図書館854-46　38コマ

三八 西尾市岩瀬文庫　ADEAC

三九 東大史料編纂所データベース

四〇 東大史料編纂所データベース

四一 『大日本史料』第12編之41　p35

四二 検索には、摂関期古記録データベース（国際日本文化研究センター）東京大学史料編纂所のデータベース、データベースれきはく（国立歴史民俗博物館）国会図書館デジタルコレクションを利用した。検索結果は必ず資料にあたり、古写本がデジタルアーカイブで提供されているものについては複数確認した。なお、「勘解由小路」については、事例が多数あるため、鎌倉初期までのもので、それぞれの資料で「勘解由小路」が初出の事例

と、本稿で考察しているものに限った。

四三 目崎徳衛校訂・解説『侍中群要』吉川弘文館　p119-120

四四 『小右記』の「神解小道」は、『大日本史料』では、「神解小道[脚之]路」○九月一日、洞院西大路以東北辺勘解由小路南北二、火アルコト、便宜合叙ス、」と傍注と便宜合叙を付している（『大日本史料第2編之24』p252）が、「神解小路」は同時期の他の古記録に見られるので、誤字ではなく貴重な一例として押さえたい。「小道」も「小右記」には多数見られ、『貞信公記』や『御堂関白記』などにも散見されるもので誤字ではない。

四五 『春記』の事例は『太宰管内志』や『玉勝間』にもこの表記で引用されている。

四六 藤井このみ「平安京の変質と小路名」『日本史研究』93

四七 『清獬眼抄』には「勘解由小路」も見られる。

四八 『二中歴』は唯一の古写本の尊経閣文庫所蔵本の複製本を参照

四九 国立公文書館デジタルアーカイブ　国書データベース

五〇 『掌中歴』は、『古辞書叢刊』の狩谷斎手校本の影印、九州大学所蔵本、無窮会所蔵本を参照した。

五一 髙橋昌明　樋口健太郎「[資料紹介]国立歴史民俗博物館所蔵『顕広王記』承安四年・安元二年・安元三年・治承二年巻」『国立歴史民俗博物館研究報告』第153集 2009.12　p417-444

五二 表3参照。『拾芥抄』（古典保存会1937）参照。紙背文書から鎌倉時代末～南北朝時代と見られ、『拾芥抄』諸本の中では最も古い書写の残欠本。

五三 第三巻と重複しているため校正・補写されなかった第五巻、国立公文書館所蔵の他の内閣本（[請求番号] 160-0227）国会図書館所蔵本。なお、この箇所には自筆本はない。

五四 鈴木進「東朱雀大路小考」『史学研究集録6』1981　p55-67
なお、この「朱雀」は東京極大路と鴨川との間にあった「東朱雀大路」だと推定されている。

五五 「山槐記」「兵範記」の事例数はデータベースれきはくによる。

五六 書陵部所蔵（江戸末期写）を確認した。

五七 勘解由使の略称「勘解」は、『権紀』『小右記』『中右記』などに見られる。

五八 『掌中歴』は、「勘解由小路」「雷解小路」併存期に成立したと考えられているが、「勘解由小路」は見当たらない。これは、「勘解由小路」が後出の表記であることを示すものである。

五九 康和三年（一一〇一）以後成立。梵語について問答体で記したもの。悉曇音の説明に日本語の発音を適用しており、日本語史資料としても貴重なものとなっている。（日本国語大辞典）

六〇 筑波大学附属図書館所蔵写本（天福2年写）　国書データベース 132コマ

六一 侍中群要（ワ03_02964）2　早稲田大学古典籍総合データベース

六二 『十三代要略2』続群書類従　八百五十四下（国立公文書館デジタルアーカイブ）

六三 『中右記　史料大成第14』p65／内閣本中右記　請求番号161-0002　長承2年秋

六四 『長秋記　史料大成第7』内外書籍1934　p169 『長秋記』では本例の他にもう1か所元永2年10月21日の記事に「上手小路」が出てくる。なお「上手小路」は「長秋記」にしか見られない。

六五 「カケユ」と施訓しているものもあるが、この場合も「カテ」より「カケユ」のほうが時代が下る傍訓であることも押さえておきたい。
京都大学文学部国語学国文学研究室編『悉曇要訣』では「神解小路カミトゲノコミチヲ云カムデノコウジト」となっている。（p68）

六六 重松信弘『国語学史概説』東京武蔵野書院　p313

六七 馬淵和夫『日本韻学史の研究』（日本学術振興会　p464

六八 かみ-とけ【神解・霹靂】［名］（「雷（かみ）解け」の意）雷が落ちること。落雷。（略）（『日本国語大辞典』）

六九 『日本古典文学大系21』岩波書店　p83 底本は東松本大鏡

七〇 この部分では、古本系本大鏡では「勘解由の小路」を採るが、本居宣長は「勘解由ノ小路を大鏡にかんでのこうぢとあり」（『玉勝間 上』岩波書店　p95）と言い、慶長・元和年間の刊本には「かんでのこうち」という仮名表記も見られる。

七一 「神鳴小路」は『二中歴』にしか見られない。『二中歴』では当該街路名は「勘解（神イ）小路」「鷹近神中一」「神鳴小路」と一貫していない。

（かでのこうじ・ことこ）